

問6

(その他、シラバスに関するご意見等がございましたらご記入願います。)

- ・統一したスタイルを目指す。
- ・受講可能人数の明記なども必要。
- ・“時の趨勢だから作る”と言った観点ではなく、学生の学習意欲の向上を図り、学習内容を着実に消化させるために、充実した内容の授業計画を提示し、教官の熱意を示すことが肝要と思う。
- ・上記(10)ウ)と重複するが、シラバスをデータベース化して、他大学の情報を教官、学生が容易にインターネットを介し、知る、見ることのできるシステムの構築。
- ・将来はCD-ROMあるいは学内LANを活用し検索を容易にすると同時に、他授業科目との関連付けをより理解しやすくしたい。
- ・各授業内容及びシラバスへの掲載内容・方法等について、点検・評価を加えながらより有効なシラバスの作成をめざして検討中である。
- ・教官全員のものを合冊したのものを作る必要はない。規格を揃えたものを作成願ひ、一部合冊し保存用や図書館へ備えるためのものとかに供すれば良い。学生に対しては、各先生から講義の初日に配布するようにすれば良い。印刷費の節約になる。シラバスは発行される当年1年限りのものという考え方で作らねばならないと思うが、教官の中には、シラバスの配付を受けた学生に対して、その学生が何年か先に受ける授業(単位取得の年次、学期は指定される)の内容をあらかじめ示すものだという考え方があり、シラバス作成を無用に困難なものにしているように思う。大学間のシラバス比較研究が必要であろう。その時、初めて他の大学との比較において自分の大学の教育の弱点や特色も見えてくる。
- ・講義室、ゼミ室の整備(数、設備)。
- ・今後は印刷物として発行するのではなく、コンピュータによるデータベース化するのが最も効率的と考えられるが、その際、各大学間での検索を可能にし、かつ使いやすいフォーマットの開発が望まれる。
- ・財務の援助がないと継続が困難である。
- ・来年度以降もシラバスを作成していくが使用頻度を高めるためにも、学生便覧との整合性等を検討して、利用しやすいよう改善していきたい。

シラバスは多大な経費と労力を必要とするので、すでに実施した研究科、学部の事例を参考に取り組みたい。

- ・シラバスの有効な活用方法について、学生、教官、事務官とも更に検討が必要なように思われる。

- ・学内ランを利用しデータベース化することが必要。

- ・学生が単位取得することを先行させて、内容の関連などを無視して科目を選択する傾向がみられる。このことを改善するためには、各科目の関連をよりいっそう明確にしたカリキュラム体系や履修方法を学生に提示することも必要に思われる。そのためには、授業内容がより詳しく分かるようなシラバスを作成していくことも今後重要な課題となってくると思われる。

- ・科目選択のためであれば従来の授業概要で用は足りるし、実際に受講する学生への学習指針としては不十分でありやや性格があいまい。基礎科目のように内容がほぼ定型的なものについてはシラバスは適しているが特講のように最新の研究テーマを取り上げるものには不向き。

- ・英語版も出して国際化する。

- ・教官によるシラバス内容のばらつきを減らすためには、社会的な合意として「詳しいシラバスのある大学ほど良い大学である」という雰囲気ができることが重要と思われる。

- ・シラバス内容、参考文献の指示等、教員の思想、信条に関わることである。前後の脈略なしにそこだけを取りあげ、とやかく言われることがあってはならない。シラバスの公表(という考えがあるようだが)を含め、そのとりあつかいには慎重を期す必要がある。

- ・きちんとしたシラバスを事前に作り、それにそった授業をするためにしっかり準備をしシラバス通りに授業をするのが当然という意識を教官が持つようになることが肝要。

そのためにも、今は、強制しても原稿を作らせ刊行し続けなければならない。

- ・国際総合(関係)学類ではシラバスの英語訳版も出版しているが短期交換留学の促進のためには非常に有用である。学類の予算内でパソコンの学類ホームページにシラバスを英和両訳で入力したいと考えているが、これに必要な予算が大きい、何らかの予算措置は考えられないであろうか。

- ・意外と学生はシラバスを見ていない。学生はシラバスに関心を示さない。シラバスの内容が魅力的であるかどうかにかかわらずこのような傾向がある。

・本学群では、開学当初より各学年ごとにカリキュラム書及び講義、実習用のテキストを作成している。シラバス作成にかかる費用は現在、学群校費から支出しているが年々その費用も増大してきているため、学群の運営に支障を来している状況である。教育内容・方法の改善にかかる経費、シラバス作成等にかかる費用については、実費相当分を別途予算立ていただきたい。

・より具体的に示す、できれば授業内容に関するキーワードを毎時間10程度示すようにすれば、科目の重複をさけることができ、学生の学習にも有効であると考ええる。

・教育学部での開講授業科目は、700を超える科目数(1つの科目を全てのジャンルに掲載するとすると、1400を超える科目数となる)が用意されているが、学生本人が調べたいシラバスをどのジャンルからもリサーチ(検索)できるシステムを早期に確立することが望まれる。

・本学は、シラバスに併せて履修手引、授業時間割、教員名簿及び大学案内をデータベース化して、学生に教育情報を総合的に提供している。このデータベースは一部を除いてインターネットに公開している。学生による授業評価(前学期、後学期の年2回実施)により、教育面におけるシラバスの有用性について調査、分析している。

・シラバスの中心テーマが講義計画等にあるとすると、学問の系統、講義とゼミ、外書講読等の科目の違いによって、一律に処理することに難しさがある。学生等の反応を見ながら順次改訂していく中で、フォーマットもある程度揃ってくるであろう。

・平成8年度は、従来の「講義要目」の内容を充実させ「履修条件」「授業目標」「評価方法」「参考図書・教科書」「授業計画(授業内容)」「教官からのメッセージ・その他」を盛り込んだ「授業計画」を作成し学生、教官等に配布することとしている。

・馬を水飲み場に連れていくことはできても水を飲むのは馬自身である。という問題欧米の学生と日本の学生では自立心に差がある。欧米で成功しているシラバスを日本にそのまま導入しても成功するはずがない。工学部ではその点について電子シラバス作成という工夫をしてみた。

・4年間で受講するカリキュラムの全体像がわかる様に作成するのがよいと思う。現状程度でよいと思います。シラバスにもある程度自由度がありませんと授業はいきいきしません。

・授業の成果をまとめ記録するための予算措置ができないものでしょうか。例えば、授業の過程が最終段階で学生から提出されるレポート等を一冊の成果報告書(仮称)などにまとめていくための予算措置です。このような報告書が毎年まとめられていけば前年度の成果を受けて、当該年度の授業を展開することができるなど学生たちにとっても大きな刺激になるうと考えられます。

- ・印刷物としての配布ばかりでなく、各種メディアを有効に利用した授業内容その他情報が得られるシステムの充実が望ましいと考える。例えばシラバスオンラインシステム、ホームページ作成による e-mail の対応など。
- ・シラバスを印刷すると大変分厚い冊子となり、それが用済みとなると膨大な紙屑となる。シラバスをコンピュータによるビジュアル化を徹底すれば省力化が計れると考えられる。
- ・現在、本学ではシラバスのデータベース化を進めているが、端末機の不足その設置場所の確保、利用の仕方の指導体制等の問題について今後検討する必要がある。
- ・将来は各大学間を広域でネットワークし単位互換制度を充実させることが望ましくこの観点からはシラバス情報センターの存立などに対する予算措置が必要となる。
- ・「開講科目」(授業概要を記載した冊子)と「授業計画(シラバス)」を並行して作成することの是非、シラバスのデータベース化が今後の検討課題とされている。
- ・本学部学生には、インターネットを利用して開設する授業科目の情報を提供するとともに、他学部の学生にも授業科目情報を提供することを検討している。このことが可能となると、事務の省力化、学生へのサービス向上などを図ることができ、またシラバス作成部数を削減することができる。
- ・経済学部のように時代の変化に応じた授業を多く求められる学部では、授業内容が毎年変化している。これに対応していくためにはシラバスをバイнда形式にすることが望まれるが予算が少ないため実現できない。インターネットを使ってシラバスを公開し、大学の教育内容を公開してはどうか?。図や写真の入ったマルチメディア化したシラバスも学習興味を高めるために効果的ではないだろうか?
- ・シラバスをデータベース化し、学生自らがコンピューターに直接ふれる機会を設けることにより、「シラバス」本来の意義とともに情報処理教育の一環として活用する方策なども考える必要がある。
- ・学生が知りたい情報と教官が学生に伝えたい情報に差があるように思います。この差を無くするような努力が必要と思います。
- ・科目数が増えた場合(例えば教養的科目)には頁数が多くなり(例えば500頁以上)携帯には適さない。
- ・シラバスのインターネット化が必用、そうすれば 1、学生は重いシラバス(本)を持ち歩く必要がない。(現在も持ち歩いていないが)。2、他大学のシラバスを容易に閲覧できる。

これにより大学間交流を推進することができる。3、社会人も容易にシラバスを閲覧でき、大学を社会に開くことができる。

・シラバスの必要性については、信州大学自己点検・評価運営委員会が1994年3月に発行した「信州大学の現状と課題」の本学の重点的諸課題の中で、「全学的シラバスを作成し、それに基づき学習成果の達成度が明確な教育効果の見えるカリキュラムとすること」とされている。

・将来的には、印刷物という文字情報ではなく、シラバスのデータベース化を図ることにより、画像情報として必用なデータがいつでも、どこでも検索できるようなシステムの構築が必用となる。印刷経費がかさむため共通教育を履修する全学生に配布できない。また、教官も授業担当教官へのみの配布となっている。

・シラバスに多様な内容を盛りこむことで冊子が部厚くなることがまぬがれない。将来的にはネットワーク化して各授業科目の検索ができるようにしたい。

・学生が空き時間に他教科の興味を持ってそうな授業を探して受講しようとするような場合には便利であると思われ、実際、学生の自由科目選択の幅を広げるという効果を持ったと思われる。しかし、開講全科目のシラバスを冊子体にして配布することは一面では不経済である。何故なら、教育学部の場合、各教科の専門科目を他教科の学生が受講することはほとんどない、特に文科系の学生が理科系の専門科目を受講するとか、その逆、実技系の学生以外の学生が実技系の専門科目を受講するなどということはないからである。したがって、将来は数冊の冊子体を用意し、データはコンピュータのデータベースにし、学生が必用な箇所だけを印刷できるようにするほうが資源の節約になると考えられる。

・細かく書くと、シラバスと実施とのくい違いが生じやすいので、授業のねらいと授業内容のアウト・ラインにとどめた方がよい。

・学生の現状に見合った方法が望ましい。コンピューターの利用が得策かもしれない。

・回答欄が空欄となっているのは、平成7年度はカリキュラム改正の過渡期にあたるため、「教科案内」(シラバス)は一部に科目のみの編集となっていますので、具体的な回答は差し控えさせていただきました。

・大学院の授業は学部教育と異なり、基礎的枠組みだけを講義するものではなく、最先端のトピックスなどを織り込みながら行うことが多く、講義の方法自体も実験的なことも多い。従って、年度や学生の質に応じて変動するので、詳細に過ぎるシラバスは、かえって不適當である。但し、学際的領域の研究においては、授業体系の整合性、統一性、方向性等を明確にする意味でも、シラバスは特に意義がある。

・現在、作成しているのはパンフレット等のみなので確定的な意見は控えるが、シラバスによって授業内容を固定化してしまうと本研究科の特長である課題解決型の授業が行えなくなる。また、学生の反応を見ての授業もやりにくくなるという反対意見が根強い。今後、ルーチンの授業に限ってシラバスを作成したいと考えている。

・学生の回答する授業に関するアンケートの一環として「シラバス」に対する学生の意見を聞き、その結果を今後の作成上の参考とすることになっている。

現在、データベース化の準備を進めている。

・本格的なシラバスを作成してから、間がないので定着化と改善を計る必要があると考えています。

・作成については、あまり複雑にならずにシンプルな方が利用しやすい。

・科目によっては作った方がよいものもあるが、全ての科目にシラバスを作る必要はないし作れない場合もある。

・恒久的な予算措置が必用。

・将来的には一般の人(特に受験生)も見れるような形態、例えばインターネットでアクセス出来るような形態が出来れば良いと思います。

・シラバス作成には大変な作業量を伴うが学生にとっては大変役に立つので今後も続けて発行することが望ましい。

・他大学のシラバスも含めて現在、形式的、画一的な項目、内容のものが目立つ。教官の個性を生かす工夫も必用だと思う。

・学生の持ち運びの容易なルーズリーフ形式にする。原稿執筆と講義の開始が空かないように、大部のシラバスは避けたい。費用の上からも、毎年印刷費を捻出できるのだろうか。

・平成8年度より充実したシラバス作成にとりかかっている。

・シラバス作成に係わらず、学生募集の時期から入学時期までに、多くの印刷物を発行しなければならない。これらは、大学の自己点検評価の成果の一貫として作成されるものであり、学外への広報的役割を果たしている。したがって、印刷費(企画料含む。)を含めた大学の広報予算を確立されることを望む。

・各学部にとって、実質的に役立つものを作るようにしたい。学部、学科の教育方法等その特性に応じたシラバスを作成する。

・平成8年度に向けては、1科目1頁(A4版)とり、さらに多くの授業科目内容の情報を盛りこむ予定である。

・各回毎の授業内容の詳細な指示、予習、復習のための文献の提示等が盛り込まれているような、シラバスの充実に向けた諸々の取り組みが求められると思われる。また学生の希望する進路に添った履修のための道案内としての役割をもたせる工夫も必用であろう。更に科目間の有機的連携を持たせるようなシラバスとする必要があるだろう。

・データベース化してマスメディアを通しても見えるようにする(どれだけの人が利用するかを考えてみる必要はあるが)。これにより学生は不必要な部厚い本を持ち歩く必要はなく、自分にとって必要な頁だけプリントアウトすればよいという利点はある。本学部の場合は、シラバスの作成は必用なものとして教官全員が積極的に参画してくれたことは、十分評価されてよいことである。平成8年度は全学のフォーマットに従って全科目一頁になり内容にも一層充実するはずである。

・学部にインターネットを利用したシラバスの活用ができるような方法を検討してほしい。

・学科によっては、インターネットにシラバスを載せているが今後学部全体としてもインターネットに載せることも考えなければならないと考えている。しかしながら、常に最新の情報を提供するためには、情報の管理・更新のための要員の絶対数が不足している現状にある。

・初めての試みであり効果や活用方法については今後十分に検討したい。

・シラバスはややもすると教官が教官用の文章を書きがちだがあくまでも学生用のものであることを書き手(教官)に強く認識させることが肝要であると考えます。

・シラバスのデータベースが完成すれば、学科ごとに分冊化し、学生には学科のものだけを配布し、経費の節約もはかるべきである。

・シラバスを作成することは当然すべきことであり、ない方がおかしい。

・来年度の授業内容を学生にきちんと知らせるといった教官の意識が全教官に徹底されていない。

・シラバス作成者の負担軽減措置が必要。

- ・シラバスの内容を向上させるための一助として、大学間の情報交換が望まれる。
- ・シラバスの学生への配付は、学生の選択・予習の関係から3月上旬が良いと思われる。シラバスは一冊にするのではなくて、授業の概要を一冊にし、詳細なシラバスは授業時に担当教官が配付する。
- ・元来シラバスは一科目又は単位の全期間を通じて日単位で特定して決めるもの。即ち月日にテーマを特定する。出席せずとも内容のわかる詳細なものが必用か否かは担当教官の考えによればよい。要するに学生の学習・知識修得に役立つものであること。
- ・形式にこだわりすぎたシラバスは却って授業計画の柔軟性をそこなうというデメリットもあるため、各学期あるいは年度単位で作成しているのを、例えば3週単位で作成して学生に配付する等、軌道修正がしやすい方法が望ましい。
- ・データベース化しいつでもどこでも検索可能にすれば良い。
- ・各大学・学部で、どのような授業が行われているかを知りたい受験生や高等学校の先生が、シラバスを入手できる体制を整えるべき。全国の大学・学部(大学院も含む)のシラバスを相互に閲覧できるシステムを構築(コンピューターの利用)すべき。教官には教育内容・方法の改善に役立ち、学生には単位互換や他大学の大学院受験等で参考になる。上記の実施に関する財政的援助が望まれる。
- ・印刷形式でなくデータベースが望まれる。
- ・各大学、さらには他国の大学のシラバスがインターネットで自由に開示できると良い。
- ・現在大学全体でシラバスを編集すべく委員会で作業しているが、出来ればインターネットを活用し他大学のシラバスとも交換したい。
- ・教官委員によって、電算化を構築中である。
- ・今後電算化による検索等も可能と成し、大学情報公開を進める予定である。
- ・本学では、8年度のシラバスを作成するにあたり、教官への原稿依頼を電子メールを使い取りまとめ等を行った。これは本学の教務情報システムの一環を利用したものである。このシステムは、まだ試行錯誤な部分もあるが、学生はこのシステムの端末を使うことにより随時シラバスを見ることが出来る。このためシラバスを持ち歩かなくてよい利便性ができた。

・各大学でシラバス研究委員会をつくり毎年教官の反応、学生の反応など有効性と改善点考えること。

・事前に膨大なシラバスを作成するよりも、受講生等の人数がほぼ明らかになった時点で、より詳細な授業計画や参考文献等を指示するやり方が効果的であろう。本学部においてはこのような方法によるシラバス補完が相当数の教官によって行われつつある。

・特にありませんが、今後少しづつその意義についての理解が深まるものと期待されます。教育評価の材料として使えるようになればよいと考えます。

・シラバス作成のための労力や費用にわりには、学生や教官における活用が充分でない感があり、この点が今後の課題であろう。

・(8) (9)については第一回目のシラバス作成であり、その効果についての分析・評価を行うまでには至っていない。

・ネットワークによる講義概要等の考慮。

・シラバスの電子化を推進し、分厚い活字の本をやめる方向を模索すべきである。

・内容の充実等冊子の形態を推し進めていけば、分量が多くなり、結果的には学生が読まなくなる恐れがある。

・現在、大学改革により四年一貫教育の立場からカリキュラム全体が見直されている。将来は、研究者・専門家コース、教職・公務員コース、就職コースの選択が可能なように指示する方向で見直されることになるだろう。その為には、関連する他学科・他学部の授業内容も学生・教職員が各学部で把握公開できるようにすることが重要である。

・概して、シラバス作成は良い試みであると考えられる。今後、作成の目的を達するためには、シラバスそのものの内容の一層の向上が必用である。私どもでは、シラバス作成をはじめ、まだ年月がたっていないので、この効能についての評価は、もう少し待たなければならぬと思います。

・現在 6学科分をまとめて一冊としているが、学科ごとの分冊でもよいのではないかという意見がある。

・全学的な学期毎の時間表の作成や部厚くなり過ぎたシラバスの必用に応じた分冊化等、集中化と分散化を心がけなるべく利用しやすいシラバスを作成する努力が必要。

・大学院の授業に関するシラバス作成も近々の課題になると思われる。

・インターネット(WWW)内に全大学のものを統一的にアクセスできるようにしてはどうか。各大学での授業計画の参考、受講の相互交流等に役立つと思う。

・シラバスの利用に関して、まだまだ不慣れである。実際の講義の進行に合わせた修正、補足ができれば、一つの改良となろう。これは、電子メール等の電子化が前提となる。